令和7年度　第14回「白山市ミライ会議」会議概要

※会話の順番を入れ替えたりまとめたりしています。
※制度などの説明は、会議開催時点のものです。

日　時：令和7年9月23日（火・祝）　10：00～

場　所：蔵山コミュニティセンター

参加者：10 名

◆ **<u>蔵山コミュニティ協議会は生涯学習＋防災を主軸に活動していますが、担い手や参加者を増やし、将来的には「蔵山はこんないいところだ」と知ってもらえるようにしたいと考えています</u>**

（参加者）

5年前からの検討会や準備会を経て、昨年４月に蔵山コミュニティ協議会が発足したのですが、現状では地区の多くの方が十分に理解しておらず、地区自体への関心も薄くなっていると感じています。

その理由の一つは、蔵山地区がもともとのんびりとした農村地帯だったところ、現在では新しい住民が増えて、蔵山が「寝に帰るだけの場所」という印象になっていることではないかと思っています。

先日の防災訓練でも参加者が少なく、やはり根本には地区に対する愛着や関心の希薄さがあると思います。今後の大きな課題は、次の担い手や参加者をどう増やすかという点です。一部の方は熱心に取り組んでくださっていますが、地区全体に広げるにはさらに積極的な発信が必要です。

そのためには若い世代や女性の参加を増やすことが重要だと考えます。現状、コミュニティだよりでお知らせはしていますが、ネット社会ですから、インターネットでの情報発信を強化すること、そして各町内会長に協力を求めることがポイントだと思います。住民の動きが不可欠な場面では、地域コミュニティ組織だけでなく町内会長の働きかけが大きな力になります。町会長協議会には、こ

の点を検討していただき、住民に対して地域コミュニティ組織の意義や活動をもっと伝えていただきたいと思っています。

現時点でコミュニティが始まって何が変わったかと言えば、大きな変化はまだ感じられません。従来の公民館で行ってきた生涯学習が中心で、そこに防災という要素が加わっている状況です。

今後、地域の方々の関心や満足度が一定程度高まれば、自然と蔵山の歴史や文化に目が向く段階になっていくはずです。その段階に到達するためにも、まずは防災訓練をより実効性のあるものにして備えを固めることが大切だと考えます。その後徐々に文化や歴史の発信にも取り組んでいきたいです。蔵山には魅力的な点がたくさんありますが、今は余裕がなく十分に発信できていないのが現状です。新しい住民の方々に「蔵山はこんないいところだ」と知ってもらうことが大きな課題です。

地区に住むいろいろな人を発掘し、手を差し伸べながら参加を促していくことが我々スタッフの重要な役割です。今後も一つ一つの課題を皆さんとともに解決していきたいと思いますのでよろしくお願いします。

（市長）

防災の話に関連して、能登地震を経験された教育長さんに来ていただき、講演をしてもらった地区がありました。災害が起きて避難所が開設されでもすぐに行けず、結果として地域内で助け合うしかなかった、というお話がありました。

この話からも、日ごろからの地域づくりが防災や避難所運営に直結することがわかります。前山田市長も同様に、防災を核に据えることで地域づくりを進めてほしいという強い思いを語られていました。これまでの公民館活動に加え、地域コミュニティ組織として地域づくりを進めていただきたいと考えています。

いざというときの基本は地域です。日ごろから顔を知っている関係や、一緒に何かを頑張ってきた関係性があればこそ、緊急時にスムーズに動けます。学校や PTA の活動で地域の親同士が顔を合わせる機会を持つ、そうしたつながりが大切です。コミュニティだよりなど、さまざまな工夫をしているところもありますが、各町内会でのご苦労もあると思います。

◆ 危機管理センターの役割はどういったものですか

（参加者）

自然災害はいつ起きてもおかしくありません。本庁舎の横に白山市危機管理センターが建設されていますが、たとえば鶴来支所の横や鶴来中学校の近くにも、子どもから高齢者まで利用できる耐震性のある建物があればと考えています。

鶴来中学校は二次避難施設になっていますが、日中であれば子どもたちが体育館から直接移動したり、地域の方が避難したりできるような施設で、自家発電装置などを備えるとさらに安心です。

（市長）

現在本庁舎横に整備している危機管理センターは、本部的な機能を持つ施設で、避難所を目的としたものではありません。白山市全域の災害発生時の本部としての役割を担います。

センター内には、モニターなど各種設備を備え、国土交通省や気象台など関係機関とオンラインでつながり、迅速に連携できる体制を整えています。能登半島地震の際に県が設けたような本部機能を持つ施設とお考えください。避難所は地区ごとに設定しており、先日公表したハザードマップに基づいて運用しますが、災害の種類や状況によって対応は異なるため、本部の危機管理センターと支所が連絡を取り合って対処していきます。

センターに職員が 365 日常駐しているわけではありませんが、災害が発生した場合はすぐに対応できるようにしています。例えば先日の大雨の際も、担当者には気象台長や石川土木の事務所長などから時間を問わず連絡が入ります。冬場は雪が降り出すと土木課の職員が泊まり込んで除雪体制を維持するなど、危機対応を行っています。

今ほどのご意見としては承り、鶴来地域や白山ろくなどで災害が発生した場合に対応が遅れないよう、さらに体制を強化していきたいと思います。

◆ 地区社協で子ども食堂や高齢者の食事会など交流の場を広げる活動をしています

◆ 災害発生時の住民情報の把握について、対応策や情報共有方法を教えてください

（参加者）

蔵山地区社会福祉協議会では子ども食堂を年 5 回実施していましたが、今年からは高齢者の食事会というのを始めました。第 1 回で 25 名ほど集まり、高齢者の方とゲームをしたり、食事したりしました。そういう機会をこれからもっと増やしていきたいなと思っています。また、高齢者のサロンの活動もしています。

（市長）

各地区を回ると、少子高齢化が共通の課題として挙がります。地域のつながりをつくるサロンのような活動を活性化することは、重要なテーマです。

防災の面から見ると、避難の遅れや避難行動が困難な方への対応が問題になります。個人情報の取り扱いに関して避難困難な方からどのように情報を得るかという課題も含め、どのように避難支援を行うかを定めた避難計画を考える取り組みを進めているところもあります。

（参加者）

災害発生時の個人情報の扱いや、誰がどこに住み、どのような生活状況にあるかといった情報が地域コミュニティ組織側では把握しづらい点について、市に対応策や情報共有の方法を教えて

ほしい、という要望があります。こうした情報があれば、いざというときの対応がより迅速になるはずですが、いかがでしょうか。

（市長）

市と町内会、また地域コミュニティ組織や自主防災組織と協定を結ぶことで、市が作成している要支援者名簿を提供することができます。ぜひ協定の締結をお願いしたいと思います。ただ、名簿への記載を希望されない場合もありますので、実際には完全な名簿という訳ではありません。

個人情報の保護は大変重要ですが、何か起こってから始めて使うというのではなく、災害時に実際に支援できるようにするために、訓練の際にぜひ名簿を利用していただければと思います。

◆ 実効性のある防災訓練にし、参加者を増やすために活動していきます

（参加者）

南消防団蔵山分団に所属し、安全安心部会として活動しています。これまで消防団員として消火に関する訓練は受けてきましたが、蔵山の各種団体や住民と連携した活動経験が乏しいため、具体的な進め方がわからないのが現状です。今後の進め方をどうしていこうかと思っています。

これまでに地区の防災訓練を 3 回実施しました。徐々に参加者が増えてきてはいますが、まだ参加していない方々をどう巻き込んでいくかが課題です。今後、防災士の力を活かせるようにできればと思っています。

（市長）

地区ごとにいろいろな進め方がありますが、危機管理課はそうした情報を把握していますから、遠慮せずに相談してください。どのような形が適しているかも一緒に考えられると思います。分団としては日頃から消防活動や災害対応に尽力いただいていますが、地区の防災訓練は何回か実施されましたか？　細かな点で「こういう方法はどうか」といった意見はありませんか。

（参加者）

実は蔵山地区では 2 年前に 1 度防災士が集まって打ち合わせをしたことがありますが、それ以来やっていません。組織はありますが、立ち止まった状態なので、今後は活発にやっていきたいと思います。

（参加者）

この辺りは災害が少ないため「大丈夫だ」という安心感があって防災に関心が向きにくいのかもしれません。しかし、訓練に参加した人にしか得られない経験があるのも事実です。自宅にいてもできる訓練があれば参加のハードルが下がるのではないかと考えています。例えば会社で行う避難訓練のように、案内があればすぐに外に出て、町内の誰かに声をかけて安否確認をする、といった体験ができると有益だと思います。

先日の能登での事例では、高齢者が外に出られず「揺れが鎮まるまで待っていた」という話を聞きました。こうした人たちを安全に屋外へ移動させる方法はまだ十分に学べていないので、体験・学習できる仕組みがあるといいと思います。

（参加者）

防災訓練の内容は地域の特徴によって変わります。蔵山でも場所によって危険の種類が違っていて、例えば土砂災害をテーマにすれば山側の方は率先して参加してくれますし、手取川に近い方は水害への関心が強い傾向があります。どの災害を主に扱うかによって訓練のやり方が変わるため、その点の調整が難しいと感じています。

（市長）

蔵山地区は、豪雨の際は獅子吼高原山系からの雨水の流入の影響を受けやすくなること、地震では森本・富樫断層で想定される震度と被害想定が大きくなっていること、雪害も心配になるかと思います。

各災害について防災士と細かく打ち合わせを重ね、地区ごとの実情に即した対応を詰めておくといいかと思います。つい「ここは大丈夫だろう」と思い込んでしまいがちですが、場所ごとに危険性は異なり、判断が難しいことが多いです。

防災訓練としては、私も起震車で震度 7 を体験しましたが、その場で冷静に逃げることを考えるのはほぼ不可能でした。こうした体験を通して備えを考えることは非常に重要です。

高齢者などの避難要支援者への対応では、安否確認用に家の前に黄色い旗を掲げ、掲示した家は無事の合図にする取り組みがあります。屋内での避難が必要な場合の対応例としては、山側が危険なら山から離れた部屋へ移る、川の近くなら垂直避難で上階に避難するといった具体的な行動訓練も必要です。

感震ブレーカーの設置や、住宅の耐震化についても補助制度がありますが、より充実させる必要があると考えています。こうした要望や相談は市の危機管理課に伝えていただければ、対応を検討します。

（参加者）

私は南消防団の女性分団員として活動し、防災士と普及員の資格を取得しています。ここ 3 年間防災訓練を担当してきましたが、会場近くにお住まいの参加者が中心で、車でないと来られない

場所からの参加者は非常に少なく、地区として防災への関心が薄い印象を受けます。

女性分団として各地域の普及活動やイベントに参加していますが、町内会ごとに差があり、きちんと「ここに人がいる・いない」を把握して動けている町内会もあれば、そうでない町内会もあります。町内会単位で連携して動けるような仕組みを作り、行動してみることこそ、本来の訓練ではないかと考えています。

災害がいつ起きるかはわかりません。何も準備していないまま即座に行動するのはおそらく難しいでしょう。多くの人は他人事に感じてしまいがちで、私自身も実際に被災した経験がないため、町内会単位で確実に行動できるかは自信がありません。だからこそ、一人一人が関心を持ち、少しずつでも動けるようになるための防災訓練を行っていきたいと考えています。

防災講演会では、実体験を語る方やボランティアとして活動した防災士の話を聞ける機会があるので、ぜひ足を運んでほしいと思います。そうした生で伝えてくれる声が、防災への関心を高めるきっかけになると考えています。

防災はどうしても関心が薄れがちで、講演会の集客もなかなか難しいのが現状です。どうすれば関心を持ってもらえるかを常に考えながら、女性分団の活動を続けていますが、やはり簡単には解決できない課題だと感じています。

（参加者）

地域で一番小さな単位から始めるのがいいと聞き、町内会にある自警団や女性部、シニアクラブ、老人会などのうち、所属している自警団から活動しました。

毎月の訓練が終わった後に短い勉強会を開くことにして、「ちょこっと知っとこ防災の第一歩」と題して４～５年ほど続けました。当初は町内会全体に広めていこうと思っていましたが、防災の範囲は広く、マンネリ化してしまったこともあって挫折してしまいました。継続には大きなエネルギーが必要だと実感しました。

（市長）

継続していくこと、活動を広げていくことは難しいですね。例えば町内会で炊き出し班とか何々班とかだいたい決めるといいのですが、なかなか訓練までいかないということもあります。

いざというときには、集まった人たちで役割分担して対応するしかありません。体験型の活動を重ねることで、いくらかは役に立つこともあるでしょう。しかし、それだけでは不十分で家の中での避難の仕方など日頃からの学習も必要です。災害現場を見ると、想定外のことが起こるのだなと実感します。防災意識を高めるのは簡単ではありません。啓発や訓練の工夫が必要ですね。

◆ **協力して子どもの登下校の見守りなどを行っていますが、さらなる交通安全の啓発が必要です**

◆ **蔵山地区出身者の作品などを市の地域資源として活かしてはいかがでしょうか**

（参加者）

交通安全協会でも、関心を持ってくださる方が年々減ってきているという悩みを抱えています。

具体的には子ども見守りボランティアとして小学校の登下校時に旗を持って子どもたちを見守り、学校まで付き添って戻って来てくださる方がかなりいらっしゃり、大変助かっています。ただ、例えば自転車の乗り方については、二人乗りの禁止や、「止まれ」で必ず止まること、車は危険であるといった基本的な注意点をもっと教える場が必要だと感じます。これは学校でも取り組めるのではないかと思います。

最近は、原付や電動自転車に加えて、電動キックスケーターの普及も進んでおり、中には時速30～40km 出る危険なものもあります。こうした乗り物については大人ですら十分な周知がされていない印象があり、子どもたちにはなおさら情報が行き渡っていないと感じます。

地域のメディア、例えば「あさがおテレビ」などでも交通安全についての情報をもっと取り上げ、広く周知していただければありがたく思います。どうぞご検討ください。

交通安全の集いでは、運転技術のシミュレーションができるようになっていました。何歳ぐらいですよみたいに判定されるのは、確かにいいなと思いましたし、一般の方も参加できるよう案内を出すのもいいかもしれません。その中で、広い対象者に、交通安全の啓発ができていけばいいなと思います。

交通安全から離れますが、自転車は移動手段として活用して、サイクリング道路の手取キャニオンロードももっと宣伝して、いろんな人に来てもらえれば活性化につながるのではないかなと思います。

（市長）

交通安全は啓発が大切になりますね。市でも広報はくさんやホームページ、市民課窓口のモニターで注意喚起をしたり、幼児と高齢者を対象に交通安全教室を行ったりしています。「あさがおテレビ」での情報提供についても、今後、白山警察署とタイアップしながら、啓発手段として活用していければと思います。

交通安全の集いでは、一般の方も参加できるように広く広報し、催し内容についても、興味を持って参加していただけるものになるよう工夫していきたいと考えております。

手取キャニオンロードは、県が整備する「いしかわ里山里海サイクリングルート」の一部として、ナショナルサイクルルートの認定を目指しています。また、市内を広く巡る自転車イベント「ジオライドハクサン」も始まりました。

鶴来では観光連盟と民間事業者が、白山ろくへ向かうのに適した電動アシスト付きのｅバイクのレンタルを行っています。また、石川線に関する協議の中で、自転車を電車に載せる「サイクルトレイン」を、野町駅だけではなく他の駅でも使えるよう駅施設を一部改修する計画です。

金沢までたくさんの観光客が来られています。その方々に、石川線を使って鶴来まで来てもらい、楽しんでいただきたいという思いがあります。民間事業者でも、金沢でのオーバーツーリズム対策や金沢では体験できない白山市ならではの自然の強みを活かし、そこを自転車で走るといった企画を進めているようです。

（参加者）

市の観光誘客や PR に関する案ですが、蔵山地区は『こびとづかん』の作者の出身地ですので、もっと地域資源として活用してはいかがでしょうか。例えば、交通安全や教育分野、農産物ブランドにイラストを使えば、「ここがこびとづかんの発祥の地だ」ということを伝えられ、興味を持っていただけると思います。

先日は台湾からこびとづかんファンが訪れていました。まだ興味を持つ人はいるはずなので、そうした来訪者を呼び込む取り組みも大切だと考えています。

◆ コミュニティスクールの活動は校区と地区が異なることでの進めにくさがあります

（参加者）

コミュニティスクールの推進に関することに課題があります。蔵山地区の場合、子どもたちが朝日小学校に通うグループと明光小学校に通うグループに分かれてしまいます。特に明光小学校は林地区、舘畑地区、蔵山地区の 3 つの地区から児童が集まっているため、どの組織と重点的に連携していくのかを決めるのが難しい状況です。蔵山地区としては朝日小と明光小の両方に力を入れるべきかとも考ますが、地域コミュニティ組織ができたばかりで議論が進みにくく、ここ 3 年ほど前に進みづらいところです。

このあたりは市からのご指導やご支援があると、話を進めやすくなるのではないかと考えています。市教育委員会の関与などによって、地域と学校が連携する枠組みが整えば、子どもたちが地域に愛着を持つ取り組みもより効果的になるはずです。せっかく良い構想があると思いますので、市としてのご支援・ご指導をぜひお願いしたいです。

（市長）

鶴来地域の小学校の設立は、朝日小そして明光小ができ、分離して広陽小ができています。さらに前は地区ごと、ここでは蔵山小学校があったと思いますが、これが統合したり分離したりとやっていると校区が複雑になってきたわけですよね。

コミュニティスクールを進める際にどこに軸足を置くのかという問題は、いくつかの地域で生じていて、今後の検討課題となっています。

昔ながらに 1 コミュニティにつき 1 小学校という形でまとまっている地域は、スムーズに運営できています。

校区を変えるとなると学校配置そのものを見直さなければならず、大掛かりな対応が必要になります。校区変更にはかなりの時間がかかりますし、地元や保護者の方々のご理解が必要で、簡単に決められる問題ではありません。

団地を作るときに、ここの団地をどうするかという話はしていけると思います。ただコミュニティとの関係性は重要で、例えば、蔵山地区は朝日小学校と明光小学校の校区に分かれていますが、これがさらに分かれるようなことはよくないかと思います。

（参加者）

校区の問題は、学校規模の話もありつつ、やはり近くの学校に通えることが一番望ましいという結論になりますので、現在のように校区が入り組んでいると、学校が目の前に見えても通学できないという指摘もあります。これらの課題を整理するには時間がかかるだろうと思います。

蔵山コミュニティ協議会ができてまだ 2 年目なので、今から少しずつ、時間をかけながら、協議会になってよかったなという話になればいいのではないかなと思って話を進めていきたいなと思っています。

◆ これまで盛んに行ってきた運動会が縮小傾向で寂しく感じるとともに、地区への愛着が薄れることを危惧しています

（参加者）

私は公民館時代からちょうど 30 年この地域のお手伝いをしています。ここ数年感じるのは、この蔵山地区に対して強い愛着を持つ人が少なくなってきたということです。原因の一つは、古くからの住人に対して、半数以上がよそから来られた方になっていることではないかと思っています。

その影響もあってか、PTA の仕事をしている中で保護者の方から「お祭りのような地域行事はないのか」という声をよく聞きます。町内会によってはお宮があって棒振りやお神輿を行っているところや、子どもみこしを作っている町内会もありますが、蔵山地区のお祭りは舘畑地区などと比べてほとんど残っていません。それを寂しく思う方が多いようです。

私は青壮年会の会長も務めており、地域コミュニティ組織づくりに合わせて再編成を行いました。お祭りを含めて、地域の歴史や文化を子どもたちに伝える行事をつくっていきたいと考えていますが、一度途絶えた行事を復活させるのは大変な労力が必要です。資金面の問題もありますし、どこに相談してどのように進めるのかといった流れが見えにくいという課題もあります。壮年会内で勉強会のようなものを企画する話もしましたが、日々の行事や諸用が優先され、後回しになっているのが現状です。

これまで、蔵山運動会は、市内でも自分たちが一番だと自負して運営してきました。地域にほかに大きな祭りや行事がないため、運動会が年に一度の大きな交流の場になっており、町内会の方々も開催を楽しみにしてくださっていましたし、運営側もやりがいを感じていました。

しかし近年、特にコロナ禍以降は、熱中症対策や飲酒・喫煙に関する制約、施設内での飲食の制

限など、昔のように町内会の皆で昼食を囲んで午後もそのまま活動する、といった形が取りにくくなってきました。また、町内会の中心となる方々の高齢化や、町内会長をローテーションで回すような町内会も増えたことで、「そこまで一生懸命にやらなくてもいいのではないか」といった声を耳にするようになり、以前ほどの盛り上がりは期待しにくくなっていると感じています。

その結果、運動会自体も以前ほど活発ではなくなっていると思います。こうした状況を放置すると、地域の子どもたちや若者が蔵山地区に対する愛着を失ってしまうのではないかと危惧しています。

（参加者）

どこの町内会でも、地域を支えているのは主に 40 代・50 代で、その下の世代は、支える場にまだ慣れていないところがあります。

（市長）

お祭りでは、踊りなど大人たちが楽しんでいる場に、子どもたちも一緒に楽しんでいる姿が見られます。コロナ禍で一時途絶えていた行事もかなり戻ってきており、そうした場では子どもたちが生き生きとしています。

また、防災訓練などの地域行事でも、顔見知りがいることで自然に人が集まるという効果があります。一度途切れてしまった地域のつながりを取り戻すのは容易ではありませんから、コミュニティの力、つまり地域の結びつきを強めていくことが非常に重要だと考えています。

◆ 声を掛け合う地域を作っていくことで、子どもたちの地域愛や防災力を高めていきたいと思います

（参加者）

PTA で子どものイベントなどにも携わっていますが、あいさつ運動をしていて強く感じるのは、あいさつをしない子どもが増えているという点です。その理由を考えると、やはり地域の人とのつながりが薄くなっているのだと思います。私自身はこの町で育ったため、近所の方とは気軽に挨拶ができ、大人たちも挨拶を返してくれるという環境にありました。しかし今は、町内会の大人でも挨拶をしない人が増え、町内会だけでなく地区全体で関わりが希薄になってきていると感じます。

大人がそうした対応だと、子どもも自然と同じような振る舞いになってしまう傾向があります。今の状態が 10 年後まで続いたらどうなるだろうかと考えると、今のうちに私たちにできることをきちんとやらないと、さらに希薄化が進むのではないかと危惧しています。多様性の時代ですから、さまざまな考えがあるのは当然ですが、町内会に属さない人や、そうした活動に参加したくない人が増えている現状があります。そうした人たちを町内としてどう受け入れていくのか、例えば「災害時にはこうしたデメリットがありますよ」といった形で参加を促すのか、といった点がまだ曖昧なのではないかと感じています。

また、どこまで本人の意思を尊重するのかという問題もあります。世の中には個人を尊重する風潮があり、「それならそれでいいですよ」と言うのか、「いや、きちんと関わってもらうべきだ」と考えるのか、子ども会や PTA の内部でも多様な意見があり、そのあたりでももどかしさを感じています。

（市長）

個人情報の問題もあり、昔のように「この家はこうだ」といった細やかな情報交換がしにくくなっている現状はあると思います。さらに、町内会に加入しない、町内会費を払わないといったトラブルや、ある県では県 PTA がなくなってしまった例もあります。

これまで町内会やコミュニティ、PTA は助け合いのために運営されてきましたが、入らなければならないという決まりでなければ、入らなくていいのではと考える人が出てくるのも分かります。

けれども、それぞれのコミュニティをしっかり維持していかないと、10 年後には人は多くいても互いの顔が分からない、いざというときに「この人知らないよ」という状態になりかねません。それは地域の安全にも関わる問題です。

だからこそ、今すぐに状況を変えるのは難しくても、一つひとつ積み重ね、地域コミュニティ組織を大切にして、地域づくりをしっかり進めてほしいという願いがあります。

（参加者）

私も、地域とのつながりが薄くなっていることが気になっており、蔵山地区を寝るためだけの地区にしないようにというお話に共感しています。子どもたちにこの地区を好きになってほしい、愛着を持ってほしいと常々思っています。

コロナ禍以降、イベントや町内会の催しが縮小され、地域活動が減ってきているのも実感しています。私自身も町内会でのつながりが以前に比べてずいぶん希薄になりました。

だからこそ、町内の人に気軽に声をかけられるような環境を取り戻したいと考えています。そうした日常的なつながり、互いに自然に声を掛け合えるような関係は、いざというときの防災力にもつながります。

そのために、地域で世代間の交流をもっと活発にしたいと思います。中学校の部活動の地域移行にあわせ、そこに小学生も気軽に参加できるようにするなど、世代を超えた関わりが日常的に生まれる環境を整えたいです。子どもたちが地域に関心を持ち、主体的に関わっていけることを期待しています。

（市長）

地域のスポーツについては、現在、スポーツ少年団に中学生も一緒に参加する形を試みています。今後は、小学生と中学生が合同で活動するスポーツ少年団なども増えてくると思います。

小中学校では、すべての小・中学校でジオパーク学習を行っています。小学校では地域につい

て調べ、地域で学ぶ授業が取り入れられていることも保護者の方はご存知かと思います。学校によっては、地区の文化祭で小中学生が地域学習の成果を発表したり、地域の自然や歴史を調べ、パンフレットにまとめてコミュニティセンターや道の駅に配架したりといった活動も行っています。

学びを通じて子どもたちが自分の地域を好きになってほしいと考え、こうした地域学習には力を入れています。もちろん地区行事や地域の方々との関わりも重要なので、地域コミュニティ組織の中でも引き続き取り組みを進めていただきたいと思います。

（参加者）

昨年、6 年生が蔵山地区の学習成果をまとめたものを作成し、コミュニティセンターに展示してほしいと持ってきてくれました。しばらくの間、玄関に掲示しておき、皆さんに見ていただけるようにしていました。いい取り組みだったと思います。

（参加者）

人との関わりが希薄になっていることに危機感を抱き、町内会で、女性の会、老人会、青壮年団などの代表者を集め、どう良くしていくかを考えるワークショップを開きました。その場で様々な課題ややりたいことが見えてきて、今はそれを実行に移す段階にきています。

蔵山地区全体でも、住民全員で「どうしたら良くできるか」を考えていく必要があります。ワークショップが最適かどうかはわかりませんが、皆が考える場を作ることは有効だと思います。これまでそうした場が少なかった分、町や地域を良くしたいと考える機会を増やしていくことが大切だと考えます。

（参加者）

コロナ禍以降、個の時代が進んだと感じます。時代は新しいものを求めますが、コミュニティや伝統が古いから悪いというわけではありません。古いものの中には伝統や文化として、長年みんなが守ってきたすばらしい価値があります。それを伝えていけば、今の問題も少しずつ解決していけるのではないかと考えています。

何でも新しくて個々の好きなことを優先するのがよいというわけではなく、市長がおっしゃったように、コミュニティで助け合ってきた仕組みが今の形で残っていることを説明し、理解してもらえれば意識は変わってくるはずです。明光小学校の PTA でもそうした話を重ねています。これまで理解してくれなかった方の中にも理解を示してくれる人が現れますし、そうでもない人もいますが、少しずつ進めていくしかないと考えています。

（市長）

本日初めから話題となっていた、寝に帰るだけの町ではなく、住んでいて楽しく、住み続けたい

と思えるまちづくりは、これから本当に必要だと考えています。単に居住の場としてではなく、生活そのものに魅力がある地域づくりをしていくことが大切です。

地域コミュニティ組織ができてまだ１年余りですから、これからさらに多様な取り組みを皆さんと一緒に考えていきたいと思います。市としても、交付金や課題対応などで当然サポートしていきます。活動の幅が広がると負担や業務が増える可能性があるため、それらをどう皆で分担・補完していくかが当面の課題です。

本日は地域づくりに関してたくさんの素晴らしいご意見をいただき、大変参考になりました。今後の取り組みに生かしてまいります。ありがとうございました。